

## 丸山先生とわたくし

一九六七年文学部史学科卒業 牛田尚子

丸山先生との出会いは八七年、同窓会「幼児グループ」母の会の勉強会で、私の班が「文明論之概略」を読む」に取り組んだのが発端である。学生時代、音楽史に興味を持ち、今井宏先生から高名なる氏の本を薦められても一読もしなかった私が、元園長飯尾先生の助言を得て読み進むうち、次々と著作を読まずにはいられない程の魅力を感じた。丸山、飯尾先生のご子弟が幼児グループ同級だったこと、大学のすぐ近くにお住まいのあることを知り、年賀状を差し上げると、「素朴な質問から今まで深く教えられました」と質疑に答えてよいとのこと返事を思いがけなく戴いた。

八八年五月、一期一会の思いで、飯尾先生ともどもお迎えに上がり、同窓会七二年館まで歩く道すがら、幼児グループに始まった三木武夫氏との交流や、一高時代ホッケー部に所属の折、女子グラウンドを貸して貰えなかったこと、散歩の際、構内を通り抜けようとして断られたことをニコニコと話されるのであった。検閲による部分削除の戦前版

岩波文庫『文明論之概略』も持参された。戦前の東女は学生運動が活発で、女王のごとく男子学生を従えていたことやユーモア溢れる自己紹介から始まるお話に隣く間に時間が過ぎると、なんと質疑応答は次回にと約束して下さったのである。その後は毎年のように出席して下さり、その度「僕の本よりもっといい本があるのに」と謙虚であられた。「八八年の会」と名づけた会のために、最後の年、九六年四月にはご自宅でレコード鑑賞会まで開いて下さった。

連絡係としての私は、奥様のゆかり夫人からお誘いを受け、女声合唱団の一員となり、やがて念願かない、丸山家の蔵書整理や家事手伝いをさせて頂けることになった。

丸山家の隣りは女子大第一回卒業生、九七歳にして現役の洋画家、かつ先生のファン、三雲マリさんのお宅である。先生は「お隣りの三雲さん」という珠玉の文を書かれている。その返礼として「丸山眞男先生を偲ぶ会」で述べられた三雲さんのお別れの言葉は感動的であっ

た。

九六年五月ごろ、いつの日かお宅を文庫として保存されては、という夢を申し上げると、社会科学の本には稀覯本きこうほんはないからと、否定された。六月のある日、病室に伺うと不意に「牛田さん、東京女子大は僕の蔵書を貰ってくれると思いますか」と言われた。驚いて確認すると、頷かれた。「十分揃っていて僕の本なんか必要としないだろうか」ともおっしゃった。「ちょうど新図書館を建築中であり、喜んで貰ってくれると思います」とお答えした。具体的な名を挙げられたのは一度だけで、以後蔵書の行方について話されることはなかった。先生から預かった「言」をかくも信頼して下さった奥様、そして先生がた、引受けて下さった大学に感謝の念で一杯である。

〔『東京女子大学学報』五三三号、一九九九年一月号の「特集 丸山眞  
男文庫」所収〕



丸山御夫妻と三雲マリ（小川マリ、春陽会会員）氏  
1991年3月24日「小川マリ展」（東京セントラル美術館）にて